

日本学術振興会バンコク研究連絡センター

活動報告(2008年10月～12月)



日本留学フェア開催

独立行政法人日本学生支援機構による平成20年度日本留学フェアがバンコク(Intercontinental Bangkok)とチェンマイ(Chiang Mai Orchid Hotel)の二つの会場でそれぞれ11月20日(木)、11月22日(土)に開催された。日本から国立大学20校、私立大学15校、日本語教育関連機関14校、その他2つの関連機関が参加し、日本への留学を希望する高校・大学生を対象に、資料の展示・配布、個別面談により各校の最新の情報を提供し留学交流の促進に努めた。また、全体オリエンテーションでは、日本留学DVDの上映や日本政府奨学金の説明及び日本留学体験談の発表などがおこなわれた。



第3回大阪大学バンコク公開講座「続々 - 感染症から私たちの身を守る」

11月1日(日) Grand Millennium Sukhumvitにおいて、大阪大学公開講座が開催された。大阪大学バンコク教育研究センター、日タイ感染症共同研究センター(RCC-ERI)の主催、在タイ日本大使館、タイ国日本人会後援、バンコク病院共催により、一昨年、昨年度に引き続き、タイ駐在者に関心の高い感染症についての公開講座が行われた。大阪大学微生物病研究所感染症国際研究センター



大石和徳教授「タイでしておくべき感染症の知識 - 臨床サイドから」、国立感染症研究所 倉根一郎部長「デング熱：どんな病気か？ どう対処するか？」、北海道大学大学院獣医学研究科 貴田 宏教授「鳥インフルエンザと新型ウィルス：パンデミックの今昔物語」等のタイで身近な感染症の話が在タイ駐在員及びその家族等に紹介された。3 講演に引き続き、西宗日タイ感染症共同研究センター長の司会のもと、質疑応答がおこなわれた。

大阪大学鷺田総長 チュラロンコン大学にて講義

10月31日（金）チュラロンコン大学文学部にて、大阪大学とチュラロンコン大学文学部哲学科との共催にて、実践哲学、クリティカルシンキングなどが専門の鷺田清一総長の講演がおこなわれた。「The meaning of Waiting」と題された講演後、チュラロンコン大学の教員、学生らと鷺田総長の活発な議論がおこなわれた。



チュラロンコン大学にて事業説明

10月28日（火）チュラロンコン大学 Office of the President Council にて、Pirom Kamolratanakul 学長、Charas Suwanwela 理事長・名誉教授、Department of Statistic、Faculty of Commerce Accountancy、Theeraporn Verathaworn 学部長へ本会の事業説明をおこない、日タイの研究協力及び本会の事業について意見交換をおこなった。



ナレスワン大学 地方留学説明会参加

11月12日
（水）、13日
（木）に在タイ
日本大使館主催
の留学説明会が
ナレスワン大学



にて開催され、当センターから角田副センター長と現地職員の Benjamas Amornwongswang が参加した。在タイ日本大使館主催の留学説明会は、留学生の獲得に向けた大学の PR、日本語教育の振

興、日本観光の促進を目的として年数回開催されている。

11月12日(水)は、「Uttradit Darunee School」を訪問し、同校の日本語教育の様子し、日本より同校に派遣されている日本語教師や学生たちと意見交換した。

11月13日(木)のナレスワン大学留学説明会では、当センターを含めバンコクに拠点をもち大阪大学、京都大学、早稲田大学、国際交流基金、日本学生支援機構が参加した。ナレスワン大学長及び在タイ日本大使館隈丸公使の開会挨拶にはじまり、VTRによる日本紹介、参加機関及び大学の説明、日本留学経験者の体験談などがおこなわれた。当センターでは、学生やナレスワン大学日本留学同窓生の教員たちおよそ200名に、本会の事業説明をおこなった。

BioAsia 2008 Thailand

11月25日から27日まで、Queen Sirikit National Convention Center, BangkokにてBioAsia 2008 Thailandが開催された。今回のイベントでは、「International Conference on Life Sciences 2008」も同時に開催された。25日の開会式には、Pf. Dr. Highness Princess Chulabhornが出席され、開会の挨拶を述べられた。

今回の会議は、育種、ゲノミクス、栄養の分野からの約50名の海外招待スピーカーによる講演がおこなわれた。BioAsiaは、バイオテクノロジー分野の初めての国際会議及び博覧会として2007年から開始されている。BioAsia 2009は、2009年9月22日から25日、バンコクにて開催される予定である。(関連記事 The Nation・2008年11月26日)



第1回お茶の水女子大学国際フォーラム in Bangkok 開催

11月21日(金)、22日(土)バンコク Siam City Hotelにて、第1回お茶の水女子大学国際フォーラム in Bangkok「日本 アジアの『知』の融和」が開催された。お茶の水女子大学の先端的研究分野や教育面におけるプレゼンスを、タイ及び周辺国の研究者、企業や国際機関に周知し今後の連携を深めるとともに、日本との関係が深い企業現地法人や帰国留学生から見た日本の大学へのニーズを再認識し、アジア諸国からの学生の留学先としてお茶の水女子大学のプレゼンスを高めるために企画されたものである。



11月21日は、お茶の水女子大学郷 通子学長の基調講演の後、「アジアの知と日本の知の融合～アジアは日本に何を期待するか・日本はアジアから何を学ぶか～」とのテーマのもと、お茶の水女子大学 内田伸子副学長がファシリテータとなり、お茶の水女子大学 佐々木泰子グローバル教育センター長、国際交流基金 吉川竹二東南アジア総局長、当センター池島センター長らがパネリストとして参加、それぞれの専門や立場から講演をおこなった。池島センター長は、「学術研究の視点から」と題した講演をおこなった。



11月22日は「Education and Researches in Interdisciplinary Areas: Life Science, Information Science and nanotechnology」と「新たな日本語・日本文化・日本事情教育の方向性」と題した2つの分科会がおこなわれた。

(池島センター長の講演スライド)

学術研究の視点から

御茶ノ水女子大学国際フォーラム IN BANGKOK
池島 耕
日本学術振興会バンコク研究連絡センター

日本とタイの大学の協力、交流

日本の大学によるタイの大学への協力の例

- 拠点大学交流事業(JSPS): 先端技術分野, 生物・海洋資源, 医療, 開発, 環境問題研究
- プロジェクト方式技術協力(JICA)として行われたタマサート大学工学の拡充事業
- Sirindhorn International Institute of Technology (SIIT), 日本経団連とタイ工業連盟の共同寄付
- King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang (KMILT): JICA支援事業
- 日本の大学が中心となった人材育成、ネットワーク作り

タイの大学: 現状

- 公立高等教育機関(78)
 - Autonomous universities (13)
 - Traditional universities (15)
 - Rajabhat universities (40)
 - Rajamangala Technology universities (9)
 - Pathumwan Institute of Technology
- 私立高等教育機関(69)
- コミュニティ・カレッジ(19)
- 研究活動、人材、資金の不足と偏在
 - タイの大学から発表された学術論文の約半分は上位2大学で占められる。
 - 大学院の設置が進められ、研究の重要性が高まる一方で、教員の博士学位取得者の割合はまだ低く、大学間による格差も大きい

タイの学術(科学・技術)研究の現状

- 限られた研究開発予算: GDP比の0.3%以下
- 応用科学が中心、重点課題:
 - Biotechnology, Information and Communication Technology, Environment, Energy, Food, Health/Disease, and Disaster Prevention: タイの豊かな生物資源や生産力を生かせる分野に重点が置かれる
 - Management skills
- 研究機関: 大学、国立研究所、NSTDA(サイエンスパーク)
- 民間企業における研究インフラ(設備、人材)の弱さと少ない投資

タイの大学の将来像

- 高等教育局の描くプラン
 - 4つのカテゴリーに大学を分類
 - **タイプ(ミッション、教員の学位取得率)**
 1. 研究・大学院大学(産業の競争力強化、100%)
 2. 総合、および特化型大学(製造業を支える、70%)
 3. リベラルアーツ大学(地域の組織、ビジネスの発展、50%)
 4. コミュニティ・カレッジ(地域の持続的発展、10%)
 - Quality audit
 - 教員養成の質の向上
 - 大学スタッフ(教員、職員)の質の向上、長期的なキャリアの支援
 - 大学のネットワーク化
 - リベラルアーツ、生涯教育

タイの大学が取り組まなければならない課題

- 学術研究力の強化
- 大学教員の学位取得と研究力向上
- 学生の交流、連携プログラム(大学教育の国際化)
- 独立法人化、生涯教育への取り組み
- 外部資金の獲得

日本の大学はタイの期待に応えられるか

- タイの大学がこれから取り組もうとする課題は、日本の大学がすでに経験した、あるいは経験しようとしているものが多く、日本の大学が連携して取り組める。
- 期待に応えるには:
 - タイの研究者が希望することが、本当に必要なことは限らない。
 - 例えば、「先端」、「ハイテク」嗜好。タイの現場ですぐに適用できるとは限らない。もっと基礎分野からの積み重ねが必要かも知れない。「ローテク」の技術のほうが適切かも知れない。
 - 日本人の研究者がタイに来てタイの大学を見て、ともに研究して現状を知ることが、タイの「期待に」応えるための出発点
 - 互いを尊重する、ともに学ぶ

スラナリー工科大学での事業説明会

2008年12月11日にスラナリー工科大学を訪問し、JSPSの事業説明会及び大学関係者等との意見交換をおこなった。スラナリー工科大学は、バンコクから200キロほどはなれた(車で3~4時間程)タイ東北部のナコン・ラチャシーマーに位置する。作物生産技術、動物生産技術、食品工学、農業工学、医療技術、電子工学、土木、通信、交通、コンピューター工学、化学工学、環境工学、地質工学、セラミック工学、情報工学などの学部を有する工科大学である。

スラナリー工科大学を訪問して(池島 耕)

2008年12月11日にスラナリー工科大学(Suranaree University of Technology)へ訪問し、JSPSおよび事業を紹介するとともに、大学の現状についての聞き取りと、今後の日本との協力について意見交換を行った。訪問の連絡と会合の依頼をしてからの期日がやや短く、また学期末試験期間という多忙にも関わらず、20人以上の教員に出席いただいた。

初めに、Teaching Efficiency Development Unit の Dr. Sangrawee Pratishtananda より Suranaree University of Technology (SUT)の概要と教育の課題についての紹介をいただいた。続いて JSPS の紹介を行った。JSPS の各種事業のほとんどは、交流、共同事業を行おうとする日本の大学研究者を通じて応募すること、そのために、まず共同研究を行える日本の研究者、日本の大学へ連絡をとり、共同事業の計画を練ることが必要であるということを理解していただくように勤めた。日本に留学経験のある教員も多く、また日本で研究する機会を希望している研究者も少なくないが、JSPS の事業についてはまだよく知られていないようであり、今回のような訪問により事業説明と意見交換の機会を持つ意義は大きいものと考えられた。

スラナリー工科大学は、タイで設立当初から「独立法人」Autonomous として設立された初の大学であり、他の創設年度の古い国立大学と異なる特色を持っている。まず、研究教育分野は科学技術関連分野に絞られ、5つの Institute (学部・研究科に相当)の下で、学部、修士課程、博士課程にそれぞれ、29、29、24のプログラムが提供されている。教員数 280 に対して学生数が約 10,000(うち、学部学生 6,000 人)と非常に多く、これは、独立法人としての設置により、“効率的”な人材の育成が求められたことや、それに合わせて集中的な管理システム、e-learning システム等が導入されたことを反映していると考えられる。学生の入学については、80%の入学枠を高等学校の成績に基づき、入学試験によらずに選抜を行い、地域(大学のある東北部)定員枠も設けており、地域の高等教育機関としての役割も担っている。



研究にも高い重点が置かれ、教員の博士学位取得率は 70%と、タイの大学としては非常に高い比率である。タイ高等教育局の大学評価ランキング(2006 年)では、研究面で第 1 位にグループに評価されている。教育面でも第 2 位グループとして高い評価を受けたが、教育(特にその生産性)と研究の両方を重視しているために、教員一人当たりの学生数が多いことに加えて、地域枠で学生を獲得することから、教員の学術レベルと多くの学生の学力レベルに「ギャップ」があるという実情も生じているということであった。つま



り、タイのトップレベルを歩んできた教員が、必ずしもトップレベルではない多くの学生たちに教えるケースが多いことになる。そこで、教えることについて体系的な教授法を学んで取り入れていく必要があるという認識から、Teaching Efficiency Development Unit を新設してFD（ファカルティ・ディベロップメント）のサポートを開始している。

Autonomous Universityとして設立されたことは、小さな運営組織(Administration)という形態にも反映され、分野を超えた教員の交流の促進という目的も併せて、すべての教員のオフィスが一つのビルに集合するなど、伝統のある大学に無い特徴を持っている。訪問時の会合において、タイの大学としては教員の職位ランクや年齢による隔たりが小さいという雰囲気が印象に残った。この点は午後施設を案内していただき、夕食までお付き合いを頂いたDr. Neung Teamroongと友人の教員たちの様子を見ても感じた。タイの大学においては職位や年齢による上下関係が厳しく、ともするとそれが学術研究においても、率直な意見の交換や議論を妨げがちになっているという印象を持っていたが、スラナリー工科大学で受けた印象は、このような新設の大学において活発な学術研究や研究の人材育成が行われるために優位な可能性を感じさせるものであった。

スワンナブーム空港閉鎖

2008年11月25日、当時のソムチャーイ・ウォンサワット政権に反対する『民主主義のための市民同盟（PAD）』によるデモ隊数千人の反政府運動による占拠により、スワンナブーム国際空港が封鎖され、その後ドンムアン空港も同様に占拠され、バンコクからの国内線及び国際線航空機が発着出来ない状況となった。11月27日午後9時に、ソムチャイ首相は、スワンナブーム空港、ドンムアン空港、及び両空港周辺地域に限定して「非常事態宣言」を発令した。

11月29日より、タイ国軍基地を兼用しているウタパオ国際空港（バンコクより車で2時間程）を一部代替の国際空港として使用したが、ソムチャイ政権の崩壊により、9日後のプミポン国王の誕生日に反政府団体が撤収し、空港が再開された。

当センターでは、センター長、副センター長が11月25日にASIAHORCsの出席のためスワンナブーム空港から日本へ一時帰国する予定であったが帰国ができず、また、12月上旬にタイ国内で予



定されていた JSPS 事業関連の会議などが2つ延期（それぞれ2月、3月へ）され、当センター主催の科学技術振興調整費事業のフォーラムも開催直前に12月から1月へ変更となった。11月下旬から12月上旬頃は学術関連の会議等が集中し、なおかつ日本人研究者等が研究等でバンコクへ訪れる時期でもあり、空港閉鎖期間中は、日本へ帰国できない日本人研究者が散見され、当センターではセンターに集まっていた日本人研究者及び大学関係者等に空港閉鎖に係る臨時フライトや治安情報などの情報提供をおこなった。今回のスワンブーム空港閉鎖により、当センターでは12月以降のスケジュール調整に追われることとなった。

スワンブーム空港閉鎖の顛末記（池島耕）

2008年11月25日、ASIAHORCsの出席のため、タイのNational Research Council of Thailand (NRCT)の出席者と日本に向かう途中、バンコク・スワンブーム空港の閉鎖に巻き込まれ、ASIAHORCs出席できないという事態になってしまった。学術関連の情報ではないが、海外事情として海外出張や会議の開催等に参考になることもあるかもしれないと思い、その顛末と気付いたことをご報告したい。

25日は、すでに空港に当時の政権に反対するデモ隊が来ていることは報道されていたので、空港へは早めに向かった。空港の玄関には、通常のルートではなく迂回路を使ってアクセスした。道に詳しい当センターの運転手のおかげで、すでにデモ隊に占拠された出発ロビー（最上階）を避けて、無事に空港へ着いた。しかし、空港のカウンターへ行くと、すでに搭乗予定だったタイ航空のカウンターでは、チェックインが中止されていた。ほんの数分の差だったようだ。これが、結果的にはむしろ幸いとなった。チェックイン受付の状況は航空会社により様々で、受付を続けている会社もあった。後で知ったが、タイ航空はいち早くカウンターを閉めてしまったようであった。しかも、カウンタースタッフから状況についてほとんど説明がなく、予約変更用の電話番号1つを教えるのみである。このときNRCTのAnond長官を除く二人のスタッフはすでにチェックインおよび出国手続きを済ませており、タイ航空のラウンジにいた。NRCTのスタッフに電話連絡を取ると、飛行機が飛ぶかもしれないので、ラウンジで待機するように言われているとのことだった。一方、私たちはチェックインができず、今後の状況もわからないので、とにかくカウンター付近でしばらく待った。この間、次々と他航空会社チェックイン・カウンターが閉じられ、売店も占められようとしていたが、空港ビル内には何のアナウンスもない。あわてて水だけは確保しようと、地下の売店へ駆け込んで、すでに閉まりかけのところに頼んで、飲料水を確保した。

成田行きのフライトのキャンセルが確かになり、振替え便の可能性もなくなるまで粘ったが、ど

うにもならず、夜中の 12 時過ぎいったん空港を出て自宅へ帰った。タイ航空のカウンターは朝の 5 時に開くので、新しい情報が得られるということで、4 時半ごろには再び空港へ行った。しかし、一向にカウンターにスタッフが来る様子も無く、今日の午前中の空港閉鎖と午前便のキャンセルがタイ航空職員から知らされたのは、7 時を過ぎた頃だった。

この間、空港当局からの案内は以前無し。一方 ANA のカウンターは 6 時ごろだったか、いち早くその日の午前中の空港閉鎖決定の知らせを掲示した。

前日にいち早くチェックインした NRCT のスタッフも結局日本に飛ぶことができず、しかも出国手続きを済ませていたため、ラウンジで一夜を明かすことになってしまった。朝には、ラウンジの食べ物もほとんどなくなり、ブランケットも行き渡らず、散々な状況だったそうだ。結局、再開の見通しが立たないとして、ようやくその日の夕方にバンコク市内のホテルで待機となった。

その後、空港閉鎖は 12 月 4 日まで続いたが、日本への出張は 27 日の時点で取りやめとした。そのころから、周囲に日本へ帰国できなくなった出張中の研究者が目立つようになった。29 日からはウタバオというバンコクから車で 3 時間ほどの場所にある軍用空港を利用して、タイ航空や韓国や日本の航空会社などの臨時便が出るようになった。しかし、臨時便の座席を確保するのも大変だった。この時臨時便の運航について、早い段階で情報を得ることができて、すこしは日本人研究者の帰国に手助けすることができた。

空港が閉鎖されてから、日本へ行く臨時便が早く確保されたのは、タイ、韓国、そして日系の航空会社だった。その座席を確保するのは容易ではなかったようだが、それでも、日本への臨時便のまったく無かった米系の航空会社や、その後臨時便が出て経由便で帰国が可能になったものの、当初日本までの切符の使いようの無かった周辺国の航空会社便などの状況を考えると、日本もしくは滞在国の航空会社を使うのが、何かの場合に帰国手段は確保しやすいようである。

タイからは、陸路や地方空港から隣国へ脱出して日本へ帰国するという手段もあったが、その場合、隣国でのビザが必要で、そのために US ドルが必要だったのだが、バンコク市内で（おそらく他のタイの場所でも）タイ・パーツから US ドルに返金できないという事態が生じていたと聞いた。原因は分からないが、実際に現場にいた人から聞いたので確かである。そのドルがないとカンボジアを経由したくても、入管でビザ代が払えない。



い。どうしても困った人に、旅行会社が手持ちのドルの現金を何とかして都合したそうだ。いくら

他の通貨の両替が容易になっても、海外出張にはいくらかの米ドルの現金は持っていくべきと思った。

テレビのニュースでも空港からの中継などはほとんど無く、正確な情報を知るのは本当に難しかった。空港の状況や、臨時便の運航、ホテルの宿泊補助などの情報は、少しずつ漏れるように流れてくる。日頃の人とのネットワークが情報確保に重要であることあらためて認識した。

ナノテクノロジー研究に120億の予算を

科学技術省は、ナノテクノロジーの研究開発に年間120億バーツを超える予算を要求している。ナノテクノロジーの製品が少なくともGNPの1パーセントに貢献することを目標としている。タイ国家科学技術開発庁国立ナノテクノロジーセンター(NANOTEC)所長 Sirirung Songsivilai氏は、食物、薬、エネルギーや織物等の分野の製品に付加価値を高めるために、ナノテクノロジーの技術を利用できると述べている。

(Bangkokpost ・2008年11月7日)

科学分野のマンパワーの能力向上・育成

「世界的な経済危機の元、生命科学、農業バイオテクノロジー、食品バイオテクノロジー、医療技術を含む生物学的技術の知識開発と理解は、世界経済の競争に打ち勝つための鍵となるであろう」、ハーバードビジネススクールの生命科学担当ディレクターは述べる。

「技術は親切ではなく、また『お願いします』

とも言わず、新しいものを生み出すときに、既存のシステムと衝突し、破壊する。国と個人は、新しく巨大な変化の波に乗るか、その波をとめようとぶつかるのどちらかであろう。」と、世界的なベストセラー「As the future Catches you」の著者であるJuan Enriquez氏は述べた。

Enriquez氏は、シリキットコンベンションセンターでおこなわれた「BioAsia2008」で未来の知識社会におけるバイオビジネスとバイオテクノロジーの役割について講演をした。

オープニングセレモニーでは、Pfof. Dr. Highness Princess Chulabhornが議長をつとめ、20カ国以上の約5,000人の研究者、学者、投資家、バイオテクノロジー製品の商業開発者が「BioAsia2008」に参加した。

Enriquez氏は、生命科学の発展が経済及び政治にあたえるインパクトに関して、世界的な第一人者のひとりであるが、経済混乱が世界中で広まるのにしたがって、それぞれの国が科学、技術、教育、成長に焦点を合わせ続けるべきであると述べた。

「科学の研究とビジネスをあわせることによって、貧しい国が急速に世界的な国へと変貌することができるが、この教えを無視する国は、重要ではなくなり、最終的には姿を消すであろう。」と、述べている。

「各国は、科学分野のマンパワーの能力向上・育成をおこなうべきであり、特に研究者の研究や博士号取得を支援があげられる。これは、経済を向上させるための科学知識を向上させるための鍵となるであろう。」と、加える。

一方、タイ生命科学センター (TCELS) の Pornchai Matangkasombut 理事長は、タイが混乱なくかつ急速なネットワークのモデルにならうことで、バイオテクノロジーセクターで急速な成長を達成できるだろうとし、「資源と知識を共有し、海外の大学教員、研究者、投資家、専門家と一緒に取り組みことにより、バイオテクノロジーセクターは急速に進歩するであろう。」と述べた。

(The Nation・2008年11月26日)

タイ人の研究室嫌い

映画では、科学者はすばらしく見えるかもしれないが、99パーセント以上のタイ人が心の底から研究室で働きたくないという。タイ王国統計局調査によると、科学者になりたい子供はたった0.9パーセントで、子供を将来科学にした両親は、たったの0.7パーセントであった。

「われわれは、人々の科学技術への関心を研究するために、今年調査をおこないました。」と、Thananuch Tritipphayabutr 事務総長は述べる。

同女史は、概して給与が安いので、白衣をきて(研究室で)働くことを望まないのであると述べる。

Institute for the promotion of teaching

science and technology (ISPT)の物理学者である Ram Tiwari 氏は、タイの子供の数学と科学の成績が益々悪くなっていくと述べる。

「科学と数学のことを考えると、ほとんどの子供は気分が悪くなる。科目の内容は複雑であるかもしれないが、それに加えて、学校が興味深い教材と活動を提供できないことも子供の理数嫌いに拍車をかけている」と、同氏は述べる。

Thanin Paemj 上級顧問(National Economic and Social Development Board)は、タイでは知識集約型経済になるために、より多くの科学者が必要であると警告した。

「より多くの科学技術の分野の人材を産み出さないと、タイの競争力は他国と比べて、成長率が低くなるであろう。」と、述べた。

さらに、同氏は、ベトナムの情報通信技術はすでに、タイを越えていると述べる。

2005年の時点で、タイには、人口1万人あたりの研究者の割合が5.9人の研究者で、韓国では44.6人、シンガポールは65.8人、日本は72.1である。

また、タイでは、社会科学を専攻する学生が、科学専攻の学生より多い。Thanin氏は、研究分野における人的資源の開発が、国の競争力を高めると主張する。

「政府は理系の学生のためのキャリアパスをつくりだす民間企業に対して、何かしらのインセンティブを提供すべきである。」と加える。

(The Nation・2008年10月24日)

5人のトップ研究者

タイ学術研究会議（NRCT）、今年度のトップの研究者を5人発表した。Dr Suthat Fucharoen, Assoc Prof Sanong Ekgasit, Prof Manat Pohmakotr, Prof Soottawat Benjakul, Prof Suttichai Assabumrungrat の5人である。受賞者は2009年

2月の授賞式で30万バーツと賞状や記念メダルが授与される予定である。

（The Nation・2008年11月20日）

10月

- 10月10日 NRCTとの打ち合わせ、大使公邸夕食会
- 10月16日 理化学研究所 Douglas Sipp 氏来訪（センター長、副センター長）
- 10月22日 チュラロンコン大学文学部 Chomnard Setisarn 准教授、国際交流基金バンコク日本文化センター吉川所長来訪（副センター長）
- 10月24日 ABK Reunion Party-One Friendship Night in Bangkok 2008 出席（副センター長）
- 10月28日 チュラロンコン大学 University Council 訪問（学長、議長対応）（センター長、副センター長）
- 10月29日 大阪大学国際連携課辰巳専門職員、大阪大学微生物病研究所中嶋特任事務職員、大阪大学木内国際部長来訪
- 10月30日 大阪大学辻副学長来訪
- 10月31日 大阪大学鷲田学長講演会（チュラロンコン大学）出席

11月

- 11月1日 第3回大阪大学バンコク公開講座「続々 - 感染症から私たちの身を守る」出席（センター長、副センター長）
- 11月3日 大阪大学理事・副学長 武田副学長、大阪大学平松非常勤講師来訪（センター長）
- 11月12～13日 地方留学説明会 ナレスワン大学出張（副センター長、現地職員）
- 11月14日 NSTDA 訪問（センター長）
- 11月17日 ARAT 同窓会会長 Dr. Busaba 訪問
- 11月18日 お茶の水女子大学国際課島田氏、高橋講師、岡村アソシエート・フェロー、山崎職員、小林職員来訪
- 11月20日 お茶の水女子大学国際課高橋講師来訪
- 11月21日 第1回お茶の水女子大学国際フォーラム IN BANGKOK 出席（センター長、副センター長）
- 11月22日 第1回お茶の水女子大学国際フォーラム IN BANGKOK 分科会出席（センター長、副センター長）

日本留学フェア 2008 視察（センター長、副センター長）

11月25日 BIO ASIA2008 出席

11月26日 NRCT との打ち合わせ

11月28日 東京大学農学生命科学研究科五十嵐教授来訪

12月

12月4日 タマサート大学訪問、National Science Museum 視察（副センター長）

12月10日～11日 スラナリー工科大学出張（JSPS 事業説明、OB 及び大学関係者意見交換）

12月16日 名古屋工業大学国際交流センター長山本幸司教授、国際交流課水野係長（センター長、副センター長）

12月25日 広島大学産学連携研究センター高田忠彦副センター長、松井亨景客員教授来訪（センター長、副センター長）

日本学術振興会バンコク研究連絡センター / JSPS Bangkok Office

113 TWY Office Center、10th Fl. Serm-mit Tower

159 Sukumvit Soi 21、Bangkok 10110

Tel: +66-2-661-6453 Fax: +66-2-661-6454